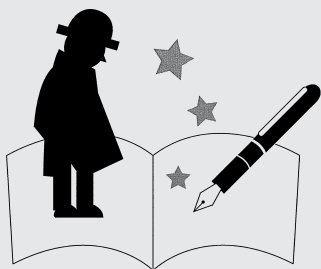


特集：賢治を書こう



昨年の花巻セミナーの席上、「宮澤賢治のオマージュ作品を書こう」と呼びかけた。

しかし、賢治はやっぱりかいだ。さまざまな顔を持つ賢治は、やっと掴まえたかと思えば、するりと体をかわして、ニヤリと笑って逃げてしまう。

それでも、多くの投稿作品があった。イーハトーブの風を感じ、鳥の声をきき、ペンを手にし賢治に迫ったにちがいない。

それにしても、なぜ、いま、賢治なのか。ページをめくってほしい。賢治がなぜこうも根強い人気を持つのか。わかるかもしれない。

